

平成三十年（二〇一八）三月二十六日発行
『大倉山論集』 第六十四輯 抜刷
（公益財団法人 大倉精神文化研究所）

クリスチャン実業家の軌跡
— 「白洋舎」創業者・五十嵐健治 —

峯岸英雄

クリスチャン実業家の軌跡

―「白洋舎」創業者・五十嵐健治―

峯岸英雄

目次

はじめに

一 五十嵐健治の軌跡

二 基督同信会

三 クリーニング業界への貢献と社会貢献

四 三浦綾子との関係

おわりに

キーワード

越佐の自由民権運動 宮内文作 上毛孤児院

田中平八 浅田ファミリー 長谷川誠三

青森のリング栽培とクリスト教 本郷定次郎

松本勇治 ドライクリーニング

家庭洗濯科学博覧会 家庭安全協会

家庭洗濯講習会 五十嵐丈夫 『夕あり朝あり』

はじめに

クリーニング業界最大手「白洋舎」の創業者・五十嵐健治（以下、健治）は、西南戦争を迎える混乱期にあった明治十年（一八七七）三月十四日、酒造業を営み、自由党県議でもあった船崎資郎の子として、新潟県中頸城郡新道村大字鴨島（現・高田市）に生まれる。両親の離婚後、四歳で五十嵐家の養子となる。高等小学校卒業後、稀代の生糸商人、田中平八の立身出世譚に触発されて上京。幾多の仕事に就き、放浪の奉公人生活を積む。日清戦争時、軍夫として中国戦線に従軍。帰国後、三国干渉に憤慨して「露領探偵」を軍夫仲間と企てるも、渡航中に斡旋業者に騙され、北海道で開墾のタコ部屋に収容され過酷な労働生活をおくる。脱走して小樽まで逃げ延び、見つけた仕事先の旅館で偶然、客であったクリスチャンの旅商人、中島佐一郎により福音に導かれ、明治二十九年（一八九六）受洗する。再度上京して、廣瀬太次郎（後にリネンサプライ業の魁となる廣瀬商会を設立）の知遇を得て、三越（当時は三井呉服店）に入社し宮内省掛となるが、日曜礼拝が困難なため三越を退社。以前経験した洗濯業を志して明治三十九年（一九〇六）、白洋舎を創業する。爾来、ドライクリーニングの研究と普及に尽力すると共に社業運営にキリスト教理念を導入し、また幾多の社会貢献を為して、今日の白洋舎の基礎を築いた。昭和四十七年（一九七二）四月十日召天。享年九十五。

一 五十嵐健治の軌跡

生育環境が人の意識と行動に影響を与えるのであれば、健治の克己心と独立心の原点を実父、船崎資郎の周辺から探ることができるだろう。船崎資郎は明治二十三年（一八九〇）自由党に入党、同三十年（一八九七）、解党間近の自由党から立候補し、衆議院新潟県議となるが、その道筋を辿る時、越佐（新潟）の自由民権運動について触れる必要がある。健治の出身地、中頸城には高田町、中頸城郡（以北・以南）を包含した「頸城三郡自由党」が組織され、赤井景韶らが牽引役となり青年民権家と共に活動を展開していた。中でも豪農民権家、山際七司は越佐自由民権の中心人物で実業経験を経て、明治十一年（一八七八）年、民権結社「自立社」創立に関与し、翌明治十二年（一八七九）、新潟県議となる。「新潟新聞」主筆として新潟入りした「憲政の神様」尾崎行雄の援助も得て、国会開設運動を推進するなど、地方行政にとどまらない国家理想像を構想する進取の民権家であった。しかし、高田・頸城地域の自由黨員を対象とした明治十六年（一八八三）の自由民権運動弾圧事件「高田事件」で検挙される。更に大井憲太郎が首謀格であった自由党左派による朝鮮内政改革「大阪事件」連座の咎で、二年間の獄中生活を送る。既に、河西英通の指摘にもあるように赤井や山際ら、越佐の青年自由民権家には直接行動としてのテロリズム志向があった。健治が日清戦争での軍夫従軍後、ロシアの三国干渉に憤激して報復行動を謀った背景に、前述のような越佐の青年自由民権家の先鋭的な行動意識が潜んでいたのかもしれない。

明治男子の願望としての立身出世志向から、明治二十四年（一八九二）、十四歳の健治は貧しい五十嵐家再興を夢見て、一代で財を成した信濃出身の生糸商人・田中平八、通称「天下の糸平」の伝記を読み、貿易商を志して家出す

る。³ 実質的には相場師であつたが、事業拠点の横浜に豪邸を建築し、為替会社、第一百十二銀行創立、水道敷設、瓦斯設置事業など時代の最先端を突き走る田中平八は、健治にとって一攫千金の成功者以上の憧憬であつた。健治の度重なる仕事の変遷と放浪と流浪の先に影法師が如く常に田中平八が居たが、それもキリスト教との出逢いから変化が訪れる。

二 基督同信会

健治は受洗前にキリスト教と一度接している。明治二十六年（一八九三）、奉公先の前橋市桑町片原の旅館「住吉屋」の主人が宮内文作であつた。宮内夫婦の祈禱と讚美歌に驚いた健治は、やがて宮内がクリスチャンであり、上毛孤児院の創設者であることを知る。前橋生まれの宮内は蚕種業、饅頭屋を経て旅館経営時の火災で火元として濡れ衣を着せられ告訴相手を刺殺しようとしたのを縁戚の伝道師、笛木角太郎から福音を説かれ、海老名弾正から受洗した。宮内は明治二十四年（一八九一）の濃尾地震による多くの被災孤児の惨状を旅館の宿泊客から聞き、宮内と同じ前橋教会員で質屋を営む横地源九郎と、第一師団騎兵隊時の療養中に聖書を読み、数寄屋橋教会で受洗し、札幌での伝道活動経験をもつ金子尚雄の協力を得て上毛孤児院を発足する。同院では画一的な児童保護事業ではなく、労働教育を主眼として院内に園芸部を設置し、更に明治四十三年（一九一〇）には農場実習地として、北海道陸別の農場を買い取り、地元農民の指導の下、農場を開拓する。寄付金以外の運営費を捻出するために幻灯機や楽器演奏による慈善幻灯会、活動写真機を購入し各地での映画「小公子」上映会（最盛期には樺太や台湾まで巡回したという）、慈善袋を近隣農家に配布し米や麦などを入れてもらう食糧確保策も施した。更に、宮内は上毛慈恵会養老院を開設した。上毛

孤児院は明治四十二年（一九〇九）、宮内の死去後、救世軍信徒の森川抱次（群馬県議会議長）や田辺熊蔵、藤巻新助らが運営し、現在も上毛愛隣社として福祉活動を継続している。⁴

宮内文作と上毛孤児院周辺の信仰を基盤とした環境は、後にクリスチャン実業家として、キリスト教理念に基づく白洋舎の運営と多彩な社会貢献事業を展開する健治に多大な影響を与えたことは間違いない。

健治の信仰生涯と白洋舎の経営理念を語るには、健児が帰属していた会派「基督同盟会」の組織と活動内容について詳述しておく必要がある。

明治二十一年（一八八八）、イギリスの宣教師、ハーバート・ジョージ・ブランドが来日し、教会無所属、教会無支援の自給伝道を展開した。伝道の趣旨は一八三〇年頃、イギリス教会牧師、ジョン・ネルソン・ダービーらを中心として英国南西部港町プリマスで起こった平信徒運動を基本とした、聖職制度や教会組織を作らずに全ての信徒はお互いをプレズン（兄弟）と呼び合う、「プリマス・プレズレン」と称されるキリスト者集団の結成を呼び掛けるものであった。「制度的教会が世俗主義と形式主義に陥ろうとするものに警笛を打ち鳴らす一種のカルヴィニズムから出てきた敬虔主義的な信仰運動」⁵であると共に教義理念の原点として聖書を重視し、教派主義を忌避し、教会に拘泥せず簡易な場所での集会所での福音活動を為す「素朴な原始教會的礼拝の形」を掲示したことで「教会荒らし」と称される、教界に大きな衝撃を与え、多くの共鳴者を輩出する。明治学院に学び、日本橋教会に所属し、伝道活動に従事していた乗松雅休が同教会内での牧師批判による分裂騒動から浅田喜三郎、星野天知、平田禿木、教会内の青年層組織「日本橋青年倶楽部」員らと共に日本橋教会を離れ、ブランドが展開していたプリマス・プレズレン運動に加わり、「基督同盟会」⁶（以下、同盟会）が発足する。同会からは浅田又三郎、首藤新蔵、松本勇治、丹森太郎ら個性的な伝道者が輩出する（信徒に事業家が多いのが同盟会の特徴であり、事例は随時後述）。

同信会を語る上で、また、健治の生涯と事業運営にとって「浅田ファミリー」の存在は欠かせない。浅田家の筆頭、浅田喜三郎（以下、喜三郎）は大阪で煙管店の丁稚奉公後、横浜で洋銀（銅・ニッケル・亜鉛の合金）を目にして医療器具、工業用家具、装飾品など多彩な用途を持つ洋白地金のアルミニウム、ニッケルの輸入販売「合資洋白会社」を明治六年（一八七三）日本橋区鉄砲町に開業し、一般業種の他に陸軍省、通信省からの需要に対応し業績を伸ばしていく。一方で、日本橋教会で長老を務めるも、先述のようにプラントの感化から乗松雅休ら他の信徒と同信会設立に至る。

浅田家の信仰構成を整理すると、喜三郎を軸に、長男・洋次郎（以下、洋次郎）、次男・正吉（以下、正吉）、甥・又三郎（以下、又三郎）、義弟・丹森太郎、そして、孫の近之助の義父が健治という布陣になる（白洋舎の社名は、「合資洋白会社」をもとに「白洋舎」とした）。

喜三郎は、大阪時代の友人で後に大阪心齋橋筋の「石原時計店」（現存）店主・石原久之助、同信会横浜集会所の丹森太郎、京都四条教会を脱退し同信会に加わった村田栄次郎と、明治二十七年（一八九四）以降、同信会の活動を拡大化していく。更に、洋白販売利益を基に出版伝道に力を注ぐ。自らはトラクト『神の教』を発行し、同信会の啓蒙に使用した。明治三十年代後半には洋次郎が個人名義で、同信会の伝道者である首藤新蔵の著作や、「信徒の家庭、求道者の讀もの」雑誌「をさなご」を発行。同誌が後に同信会の機関誌「恩寵と眞理」となる。洋次郎は個人発行から会社組織、浅田書店へと発展させ教義理念の翻訳書などを刊行した。明治四十年代初頭からは正吉が「聖書及内外福音書」出版の同信館書店を設立し、更なる文書伝道に励んだ。

東京を中心とした伝道活動を展開していた洋次郎、正吉と違い、浅田ファミリーの中で同信会の全国的展開に尽力したのが又三郎である。又三郎は明治学院に学んだ洋次郎らとは違い、美術学校に進学。在学中に受洗し、同信会の

独立伝道者となり東北から北海道へと巡回伝道した。明治三十九年（一九〇六）九月、メソジスト派を退会した長谷川誠三を始めとする藤崎教会離脱者十二名が、青森弘前で又三郎と先掲の首藤新蔵が展開していた同信会活動に合流する。長谷川は酒造業、味噌醬油製造業を経て、青森におけるリング栽培の基礎を築いた人物（他に馬鈴薯生産、銀行設立、牧場経営、温泉開発、鉱山経営）で、東奥義塾関係者と共にリング産業結社「敬業社」を設立する。長谷川は、青森の自由民権運動に参画、禁酒運動も展開していた敬虔なクリスチャンであった。同信会への移籍の理由は不明とされるが、教会を絶対視しない自由と革新を主張する同信会に心動かされたことは推測できる。プリマス・ブレズレン派は弘前でも「教会荒らし」を起こしたことになる。

近代日本におけるキリスト教社会事業の中で、石井十次の岡山孤児院を始めとする孤児救済事業は重要な位置を占める。先述の上毛孤児院に加え、本郷定次郎が開設した那須野孤児育兒暁星園の存在も意義深い。札幌農学校出身の友人の薦めでキリスト教に接近し明治二十一年（一八八八）十月、数寄屋橋教会で受洗した本郷は孤児、浮浪児を集め京橋銀座に貧兒教育暁星園を創設。明治二十五年（一八九二）四月、栃木那須野ヶ原の青木周蔵の保有地に入植し、開墾を進めながら孤児救済に尽力するも、開墾の成果不振から撤退し、同年十二月に三島彌太郎主宰の開墾地に移り、那須野孤児育兒暁星園を創設、運営する⁹。長谷川は那須野孤児育兒暁星園に資金を援助している。更に、大正二年（一九一三）の東北、北海道の冷害で長谷川は横浜から外米を調達し窮民に配布した。同時期、又三郎は函館、小樽、岩見沢、釧路で伝道活動中、長谷川からの援助で福音講演参加者に外米を配布する慰問伝道を展開した。長谷川と又三郎による信仰連携の実例である。

同信会伝道者としてもう一人、松本勇治に触れる。

音響メーカーの「パイオニア」の創業者、松本望（以下、望）は松本勇治（以下、勇治）の三男で、パイオニアの

前身の名称が「福音商会電機製作所」であったことから、望が信仰環境で育ったことが分かる。函館で漁業を営む松本家に養子となった勇治は函館商業卒業後、神戸で貿易商を営み、視察先のアメリカで、クリスチャンで後の外務大臣・松岡洋右と出逢い、キリスト教に感化され、更にアメリカで伝道活動をしていた河辺貞吉から聖書指導を受け、受洗する。帰国後、勇治は桐生、足利などでの流転の伝道生活の果てに落ち着いた神戸で、明治三十五年（一九〇二）歯科医でもあったプレマス派のハロルド・シュレードの助手となり、歯磨き粉製造と販売の傍ら、路傍伝道に従事し、更に神戸葺合区二宮に設けた「博愛苦学舎」で苦学生を支援した。勇治はこの神戸時代に新居浜への出張伝道中の大正八年（一九一九）二月、住友本社・別子銅山に勤務していた後の東大総長・矢内原忠雄に洗礼を授けている（矢内原は同信会信徒ではない）。矢内原自身は「私は如何にして基督信者になったか」（『通信』十八号、一九三四・昭和九年六月）で勇治と受洗に関する背景には全く触れていない。言うまでもなく、矢内原は内村鑑三が主唱する無教会主義派であるが、矢内原と同時に洗礼を受けた後の聖書学者・黒崎幸吉が勇治と親交があったことと、教会を絶対視せず、「集会所」という簡易施設を利用する同信会の考えと無教会主義意識が交わった結果と推測していいだろう。^⑩

三 クリーニング業界への貢献と社会貢献

明治末期、クリーニング業は「洗濯屋稼業」という意識から、充分なる市民権を得ていなかった。健治が三越の宮内省係からクリーニング業に転身した理由の支柱は「日曜礼拝や伝道の妨げにならないもの」「世話になった三越の営業と抵触しないもの」で、更にキリスト教倫理観として「嘘や駆け引きのいらぬもの」「人の利益となって害にな

らぬもの」であった。そして、開拓者精神と奉仕精神を抱き「汚れた罪を一身に引き受けて、十字架の苦しみと恥辱を受け給うキリストを思ったとき、自分のごとき人間が人様の垢を洗うことが何で恥ずかしいことがある。洗濯業は神から与えられた職業である」「汚れたるものを清潔にし、破れたるものを繕ひ、以て衛生に資し、家庭経済を助け」るものと考え、明治三十九年（一九〇六）三月、被服経済界の発展と健康で清潔な文化的生活を貢献目的とした「白洋舎」を日本橋呉服町に開業した。健治は同信会の信仰指針である聖書精読の精神から、聖書を拠点とした以下の社訓を掲示した。「畏神」（同信会の基本教義「恩寵」を認識し、感謝と礼拝の心で希望を抱き正しき生活を営む）「服権」（国家権威に従順でありたい。神という権威に従うもの、という考え方からの転意）「愛隣」（自分を愛するよりに隣人も愛せよ。愛情の精神で仕事に専念することを説く）。

洋服中心でアイロンと若干の薬品使用の西洋式洗濯法に留まっていた白洋舎の仕事であったが、牧野伸顕（当時、文部大臣）夫人から欧州のドライクリーニングの存在を教えられて、研究に着手する。健治の研究以前にも「乾燥洗濯」「乾式洗濯」という方式が模索されていたが技術不足と顧客満足度は低かった。健治は東京高等工業学校・吉武栄之進、農商務省技師・山口貴雄から研究指針を教授され、洗染工場主で東京裁縫女学校講師・瀧浦潭との共同研究へと加速させ品川大井町に最初のドライクリーニング工場を設置した。

大正九年（一九二〇）五月、健治は、クリーニング業を国益事業と位置付ける考えから、個人経営の白洋舎を株式会社へ改組し「白洋舎クリーニング株式会社」と改称する。健治のそれまでの信仰生活と聖書精読の蓄積から、経営方針として①どこまでも信仰を土台として経営すること②奉仕事業、国益事業であることを更に認識すること③すべてのことに同業者の先駆者・開拓者をもって任じること④学術的研究に重きをおき洗濯業の科学化を完成すること⑤禁酒主義をあくまで実行すること¹⁾、を目標と定めた。企業精神の指標である社歌は昭和十四年（一九三九）、北原白

秋作詞、山田耕筰作曲で作られるが、それ以前の工場歌（原案は健治の作製と推測される）の詞からも白洋舎精神を探ることが出来る。以下、教義理念を反映した工場歌五番・六番の詞を挙げる。「神と人とに仕へて 天の使命をはたすまで かたき心を結びあひ うけしつとめをいそしまん」「のぞみは高く身は卑しく 犠牲の心ふるいたて こん常春の御代またん 神祝しませ白洋舎」。

「洗濯」を単なる家事の一部ではなく、住環境の視点から清潔感を伴う衛生意識の向上と被服文化の発展と捉えた健治は、自らの主張を啓蒙活動として具象化する。まず、大正十五年（一九二六）十月電波媒体としてラジオ番組「家庭洗濯の話」に出演する。放送内容は家庭内での簡易な洗濯法、季節に合わせた洗濯法、衣類繊維の選別など、女学生のセーラー服化に代表される関東大震災後の服装文化の進捗と変化に伴う世間の洗濯への関心の高まりに応えたものであった。

次なる啓蒙は昭和十年（一九三五）五月に白洋舎創業三十年記念事業として、白洋舎多摩川工場（蒲田区下丸子）の見学を兼ねて開催した「家庭洗濯科学博覧会」である。宣伝目的ではなく公共性を重視するため「おもしろい ためになる」をキャッチフレーズに、以下の六つの綱領が設けられた。①科学を基礎とした学術的展覧会とする②社会公衆の参考となり、学校教育に資料を提供し、家庭洗濯の改善、合理化に役立たせる③主婦と女学生を対象とする④社会事業団体、学者、経験者の中から委員を選び、準備を委嘱する⑤文部省、内務省、東京府、東京市、被服協会等の後援を要請する⑥陳列、装飾、出品等には繊維生産者、百貨店の協力を求める。

主催は大正期に国家利益と産業効率向上を目的に、個人レベルでの生活意識改革と生活全般の改善と合理化を目指すため、文部省主導で創設された生活改善同盟会の発展形態である財団法人生活改善中央会であった。会期は同年五月三日から三十日までの二十八日間で入場者数は三万人で女学生と主婦が約九割という高率であった（女学校教育に

おいて家政学が全盛であったことを証明している)。来賓には鳩山春子（共立女子大創設者）、羽仁もと子（自由学園創設者）、大江スミ（東京家政学院創設者）、大妻コタカ（大妻学院創設者）、三輪田元道（三輪田高等女学校長）、河口愛子（小石川女子高等女学校長）ら主に女子教育者が出席。展览会内容は多様な洗濯方法（和洋服しみ抜き、毛布洗濯他）や、ドライクリーニング工程の紹介などで、使用の機会器具、原料薬品、研究資料の展示も行った。関係諸物の出品には東京市水道局・警視庁防疫課・東京衛生試験所等の公共機関、ライオン石鹸・鐘ヶ淵紡績等の各メーカー、東京女子高等師範学校・青山学院女子専門部等の女学校、東京工業大学・日本女子大学等の大学、東京ガス・ゼネラルガソリン他が協力した一大展覧会で、翌昭和十一年（一九三六）五月には「家政と洗濯展覧会」と改称して二回目を開催している。

明治以降の近代化に伴う、工業発展の過程で、蚕糸工場内での結核蔓延に象徴される労働環境問題から、職工法案を経て、大正五年（一九一六）に工場法が施行される。以降、全国各地で工場懇話会、工場研究会、工場衛生会等、工場法施行援助団体が組織され、工場災害予防と労働衛生改善が進捗した。大正十四年（一九二五）、先掲団体の統括機関・財団法人産業福利協会が設立される。ドライクリーニング研究で試行錯誤を重ねていた健治は、実験段階でのベンゾール爆発で自身大火傷を負った経験から、産業安全運動に積極的に関わるようになり、洗濯工場等の汽缶（ボイラー）使用の危険抑制と注意喚起機関である警視庁汽缶係を管轄する東京工場協会本部の幹事と産業福利協会の地方安全委員を務めている。

白洋舎では労務管理として、キリスト教に基づく精神発揚の為、他のクリスチャン実業家でも見られる朝礼での聖書講義を自前の教会堂（一九二五・大正十四年十月、渋谷工場横に富ヶ谷教会設立）で行い、会議前には聖書朗読と祈祷を行い、昼休み等で随時、讃美歌を練習していた。更には、禁酒奨励として月一回の禁酒講話、従業員家庭向け

の禁酒新聞が配布されていた。健治は工場を精神の教育機関として捉え、大正期の流行現象である修養志向を安易に事業所、工場に導入することに懸念を示し、精神運動が安全作業に及ぼす影響の注意点として、労使双方において①人類愛に立脚し、自己利益を排除した従業員の幸福を目的とする②迷信助長の弊害を阻止するために理智的行動を推奨する③良心に基づく道徳的行動を起こすこと④堅忍不拔の教育を為す⑤実生活に即したものであること、を説いた。

工場運営の課題である労働災害防止の延長線上で健治が取り組んだものが家庭内安全であった。健治はクリーニング業界視察と最新機械購入の為に、昭和十一年（一九三六）一月アメリカ、カナダを訪問、工場五十三ヶ所を視察した。その際、工場内事故は安全運動の徹底で減少している反面、家庭内事故の増加傾向に健治は驚く。帰国後、健治は内務省、警視庁等関係機関で天災、自殺、交通事故を除いた火事の焼死者数や家庭内での事故死者を調査し、年間一万人という死者数から人道上的のみならず家庭奉仕と白洋舎精神である社会奉仕の側面から問題解決を図るべく、関係諸氏の協力を得て、昭和十二年（一九三七）十二月家庭安全協会を設立する。活動は多岐に亘り、児童遊園で夏季休暇中の子供への衛生上の注意喚起や生活上の危害予防指導を行った。また、今日も続く全国安全週間を制度化した。

先掲の浅田ファミリーによる文書伝道の重要性を認識していた健治は、出版印刷物による啓蒙活動にも取り組む。健治はドライクリーニングの認知度の向上、衛生と消毒、洋服文化の啓蒙と普及も兼ねた無料の配布物として、博文館に勤務し「少女世界」「文藝倶楽部」の編集経験がある武田桜桃に編集を依頼した『洋服の心得 一名乾燥洗濯の栞』を明治四十二年（一九〇九）七月に刊行する（発行は白洋舎）。内容は白洋舎の工場設備の紹介の他、健治のドライクリーニング研究の相談役であった農商務省技師の山口貴雄が「衣服道徳并に衛生道徳と白洋舎の乾式洗濯」と題する序文を寄せ、健治は同書内で「乾燥洗濯の効用」で冒頭、衛生思想の発達から社会が洗濯に対して、注意と良好な関心を示していることを評価し、更にドライクリーニングが発明されたことを「至大なる家庭の幸福」と称賛

した。

更に、洗濯業界発展の一助として、それまで単発的に開催していた講習会を、家庭主婦層以外も対象としたイベントとして、大正十四年（一九二五）、「家庭洗濯講習会」を渋谷の青山会館で開催する。この講習会では白洋舎による洗濯法の伝授、指導だけでなく、健治同様、クリスチャン実業家である小林富次郎が創業したライオン株式会社の石鹸部門が協力している。

起業家の最大の課題は後継者の育成とその交代期にある。健治の長男、五十嵐丈夫（以下、丈夫）は昭和二年（一九二七）四月白洋舎入社後、昭和三年（一九二八）六月、渡米し、約半年間ワシントンのドライクリーニング組合学校にて業界視察と最新技術を修得し、帰国した。健治は戦況が激しくなる昭和十六年（一九四一）、クリスチャン実業家であることで軍部からの圧力を配慮して第一線を退き、丈夫が厳しい戦中戦後の白洋舎を牽引していく。健治同様、クリスチャンの丈夫は個人的活動として戦後の東京YMCA活動に貢献し、また、聖書寄贈活動の日本国際ギデオソシエーション結成に尽力（初代会長に就任）した。平成六年（一九九四）十二月召天。享年九十一。

四 三浦綾子との関係

昭和三十八年（一九六三）の朝日新聞懸賞小説に入選した三浦綾子『氷点』に、「茅ヶ崎のおじいさん」として主人公陽子の祖父・津川教授が登場する。モデルは健治である。

健児と三浦綾子の出逢いは、二人が偶然、仙台刑務所に服役中のS死刑囚と交流があり、昭和三十一年（一九五六）年、健治はSから「療養中の堀田（筆者注・三浦の旧姓、当時旭川在住）さんを見舞って欲しい」との依頼を受

けたことから始まる。当初、三浦は健治訪問前のSからの手紙で五十嵐「先生」という記述と、飛行機で旭川を訪れ、高級ホテルに宿泊するような金持ちの如何わしい牧師と勘違いし、面会を断るも、健治から同信会の機関誌「恩寵と真理」が送られてきたことから文通が始まり、やがて二人は面会する。健治はその時「末娘が出来たようだ」と喜びを語る。その後、三浦は結婚。そして、『氷点』が誕生する。賞金一千万円の懸賞小説と話題になった『氷点』の入選記念講演会（一九六四・昭和三十九年七月二十一日、朝日新聞社講堂）の壇上には受賞者の三浦、会場の一面には健治を始めとした同信会関係者の姿があった。健治の死後、纏められた自叙伝を基に三浦が健治の生涯を描いた小説「夕あり朝あり」を昭和六十一年（一九八六）年九月から「北海道新聞・東京新聞・中日新聞・西日本新聞」に連載する。（後、『夕あり朝あり』、一九八七・昭和六十二年九月、新潮社刊）題名の由来は旧約聖書「創世記」から、光なき世界「夕」、恩寵の世界「朝」の時間変動「夕あり朝あり」にある。同信会の藤尾正人の解釈は健治の受洗までの放浪期を「夕」、事業家としての大成期を「朝」と捉えている¹⁴。即ち、篤き信仰心で苦難の道を切り拓き、恩寵をもって社会奉仕に至った健治の生涯を物語る警句でもあった。

おわりに

「シヤドウワーク」という言葉がある。専業主婦の賃金不換算の家事労働などを指すオーストリアの哲学者、イヴァン・イリイチによる造語であるが、本論の主題でもある洗濯も含めた人間生活の根源的労働である家事は経済社会の発展と機械化でその形態は激変した。現代では、家族構成の変化と生活様式の多様化から家事代行業という業態も認知されている。洗濯は被服文化の進化と化学繊維等の開発に伴い、対処法も変化してきた。明治以降の女子教育

の中で洗濯も家政学の研究対象となった。健治が起業した白洋舎はそうした時代の需要に合致したものであり、まさに「恩寵」であった、と言えるかもしれない。

勿論、日本近代の洗濯業界は白洋舎のみで成り立ったものではない。本論では取り上げなかった、例えば昭和期の鈴木六彦による日本洗濯界社の啓蒙活動、石鹼業界の洗濯研究など業界全体の切磋琢磨の賜物であることもまた記しておかねばならない¹⁵⁾。

注

◆白洋舎の社史、五十嵐健治の生涯についての記述は『白洋舎五十年史』（一九五五・昭和三十年三月、白洋舎）、『白洋舎九十年史』（一九九六・平成八年三月、株式会社白洋舎九十年史編集委員会）を参照、引用した。

(1) 高橋有吉編纂『新潟縣中頸城郡 衆議院議員資格者名簿』（一八八九・明治二十二年十月、精良堂）には新道村鴨島在住者として、船崎資朗^(マヤ)、健治の祖父・船崎宇平の名前が掲載されている。

(2) 河西英通「現代社会と自由民権運動」（町田市立自由民権資料館紀要「自由民権」一九、二〇〇六・平成十八年三月）。

(3) 明治十六年（一八八三）に死去した田中平八の伝記類は数多いが、生前期のものとしては津田権平『明治立志篇 一名民間榮名傳』（一八八〇・明治十三年一月、思誠堂）、竹内螻亭編纂『起業秀才 明治百商傳』（一八八〇・明治十三年十二月、東京出版會社）があり、益田孝、大倉喜八郎らと共に田中平八が取り上げられている。田中死後と健治の上京前のもものとして、川田孝吉『児童教育 商人出世之鏡』（一八八八・明治二十一年十月、いろは書房）、阿部秀吉編輯『近世偉業 日本立志篇』（一八八八・明治二十一年二月、自由閣）などに「田中平八傳」が取められている。少年期の健治がどのような田中平八の伝記を読んだのかは定かではないが、虚実織り交ぜた田中平八の立身出世譚は、健治も含め多くの地方青少年に影響を与えたであろう。

- (4) 同志社の学祖・新島襄が安中藩出身であることを契機に、安中教会に新島門下の海老名弾正、柏木義四郎が赴任し活発な伝道活動を展開した。また、味噌醬油醸造業・有田屋の湯浅治郎らクリスチャン事業家による廃娼運動など、上毛地域のキリスト教風土は豊熟していた。森川抱次も養蚕製糸業者で廃娼運動に従事した。森川の事業軌跡については自叙伝「敢闘七十五年」（一九四三・昭和十八年十月、紫波館）がある。田辺熊蔵は前橋で菓子舗「平和堂」経営の傍ら上毛孤兒院職員となり、その後の上毛愛隣社を支えた功労者。尚、熊蔵については息子の田辺誠『敬神愛人 田辺熊蔵の生涯』（一九八四・昭和五十九年十一月、日本評論社）がある。
- (5) 岡部一興「事業家長谷川誠三」（横浜プロテスタント史研究会報）五五、二〇一四・平成二十六年十一月）。
- (6) 乗松雅休は海外宣教師として生涯を朝鮮伝道に捧げた。丹森次郎は同信会横浜集会所時代に横浜製糖、神戸の増田製粉を創業した増田増蔵に洗礼を授けている。
- (7) 浅田喜三郎と洋次郎に関しては、小寺純雄「アルミニウム輸入のバイオニア 合資洋白会社浅田喜三郎と洋次郎」（「アルトピア」二六（九）、一九九六・平成八年十月）を参照。健治は明治三十五年（一九〇二）、二十五歳時に同信会信者の薦めで、宇野ぬいと結婚した。ぬいは先掲の平田禿木と共に日本橋教会で受洗した星野天知の姉・星野千代が営む砂糖問屋に奉公しており、伊豆韮山の江川太郎左衛門の家中、宇野家の末裔であった。
- (8) 青森におけるリンゴ栽培の由来は諸説あり、明治七年（一八七四）から同十一年（一八七八）まで東奥義塾英語教師を務め、弘前教会の基礎を築いたアメリカ・メソジスト監督教会宣教師、ジョン・イングがトマト、アスパラガス、レタスなどの種子苗木移入と共に西洋リンゴを紹介したことでリンゴ栽培指導に尽力した説と、明治十五年（一八八二）植物学者でカトリックの外国宣教会神父、ユルバン・ジャン・フォーリーが、青森での布教活動中に旧津軽藩士で果樹園芸家の菊地楯衛と共にリンゴ栽培に着手した説がある（大木英二「イング」・小野中亮「フォーリー」）『日本キリスト教歴史大事典』、一九八八・昭和六十三年二月、教文館、富田仁「青森りんご」とフォーリー神父」』『図書新聞』、一九八二・昭和五十七年八月二十一日）。いずれもキリスト教者が青森のリンゴ栽培に尽力していたことになる。

(9) 那須野孤児育児暁星園の実情は困窮を極めており、中村屋創業者の相馬愛蔵が同院を訪問すると「孤児たちは氏（筆者注・本郷定次郎）の庇護の下に不自由なく暮らしているであろうと思いのほか、食べたい盛りの子供たちに薄いお粥が僅かに二杯ずつより与えられないという窮状であった。子供たちが本郷夫妻に取りすがって「も少し頂戴よ」「頂戴よ」と哀願するのには氏はそれを与えることができない」。見かねた愛蔵が募金集めに奔走したことを書いている（相馬愛蔵『二商人として』、一九三八・昭和十三年七月、岩波書店）。

(10) 松本勇治については松本望『回顧と前進』（一九七八・昭和五十三年六月、電波新聞社）参照。矢内原忠雄の息子、矢内原伊作は「内村鑑三の無教会主義とブレマス兄弟団（筆者注・同信会）の主義とのあいだには、制度をもたず個人の信仰を重んずること、聖書を重んずること、という二点で共通するものがあつた。そんな関係で松本勇治はしばしば神戸から新居浜に来て伝道活動をしていたのである」（矢内原伊作『矢内原忠雄伝』、一九九八・平成十年七月、みすず書房）と記している。

(11) クリスチャン実業家でライオン歯磨の創業者、小林富次郎が日本禁酒同盟会幹事として禁酒運動に尽力したように、健治もまた禁酒運動を通して宗教倫理観だけでなく商業道德と健康体での操業従事を説いた。白洋舎では戦中、戦後で途絶えた禁酒運動を昭和二十九年（一九五四）に白洋舎禁酒会として再開した。

(12) 『産業福利パンフレット第二號 工場に於ける勞務者教育』（一九三八・昭和十三年七月、財団法人協調會産業福利部）。

(13) 協力関係者の特色として、家庭安全という側面から女性運動家（本野久子〓愛国婦人会会長）（谷野せつ〓女性官僚、女性労働環境を研究）、女性教育者（大江スミ〓東京家政学院創設者）（嘉悦孝〓嘉悦学園創設者）（河井道〓惠泉女学園創設者）、女性キリスト教運動家（山室民子〓救世軍・山室軍平の長女で文部省女性視学官）（守屋東〓社会事業家で日本基督教婦人矯風会の中心人物、娼娼運動に尽力）らが参集している。

(14) 藤尾正人「解説」（『三浦綾子全集』第十三卷、一九九二・平成四年十二月、新潮社）。

(15) 横浜協同洗濯クリーニング業組合では、昭和三年（一九二八）から横浜工業高等学校内で受講生一二七名を集めた勉強会「化学研究会」を組織し、その成果を『化学研究會記録』（一九二九・昭和四年十月、横浜協同洗濯クリーニング業組合）と

して纏めている。序文には「洗濯の業は潔癖症の我國民には日常生活上欠くべからざる大切な仕事であり」「爰に於て斯業者も、豊富な科学的知識と、周到なる科学的知識操作に長ずるにあらざれば、到底斯業者たるの資格を有せざるに至った。『洗濯の巧拙は一國文化のバロメーターだ』と言はれるは、実にこの意味を言ひ現したものである」とあり、白洋舎精神を追隨している。同書の内容は各種洗濯法や薬品使用法と共に山崎敏一（衣類洗濯に関する著作を遺している業界人）「ドライクリーニングの科学的知識」が掲載されている。日本におけるドライクリーニングは白洋舎が嚆矢であるも、後続の業界関係者も研究に余念がなかったことが窺える。